

2017 年度

フィールドワーク活動

(FRIENDS PROJECT)

報告書

2018 年 3 月

慶應義塾大学法学部

塩原良和研究会

星座占いによると、しし座は、プライドが高いらしい。たかが占いではあるが、まさに、8月生まれ、しし座である私のプライドは、信じられないほど、高い。自分の弱点に向き合うのがとても苦手である。

しかし、塩原ゼミにいと、そのプライドは、一気に崩れる、というか、みんなが崩してくれる。以前最終プレゼンテーションを作っていたとき、「フィールドワークで一番学んだことは何か」という話題がでた。振り返ってみると、私にとってフィールドワークは、「今まで見ないふりをしてきた自分自身と対峙する場」であった。つまり、学んだのは、「自分の弱さ」であった。

小学校ではリーダー的役割を担い、中学受験をし、毎日勉強や部活動に励み、大学受験も成功する、そのようなレールをたどった私は、自分の強さを見せることに必死であった。実は、慶應に入り、そのプライドは少し崩れかけた。世の中には「すごい人」が一杯いると実感し、私なんて、たいしたことない、と思い始めた。それでも、私はなんとか、自分の弱さには蓋をして、他者の粗探しをして自分のプライドを保つ、というなんとも意地の悪い学生生活を過ごしてきた。

よく私は、「自分に厳しい」と言われる。しかし、実際は、自分にとっても甘い。自分の弱さが見えてくると、それを違う「強い」部分で蓋をし、見ないようにする。そんな甘さが、私のプライドの高さにつながっている。強さを伸ばすのは得意でも、弱さに対処するのが苦手なのだ。

そんな私を変えてくれたのは、塩原ゼミそしてフィールドワークで出会った人たちだった。

ゼミ生のみんなは、私の大切な友達・後輩であり、尊敬する人たちである。特に同期、なかでも鶴見ラウンジに通っているメンバーと関わることが自然に多くなるが、彼・彼女たちは、私がないものを持っている。「私だったらあんな風に生徒に声をかけられない」「私だったらあんなに生徒と距離を縮められない」「あのとき、〇〇だったら、もっと良い方法で対応できただろうな」そんな風に、毎週思うのだ。みんなが、何か特殊な技術とか、方法を使っているのではないと思う。うまく表現できないので、「人となり」という言葉をここでは使っておく。一人一人の「人となり」は、私ができないところ、気づけないところを気持ちよくフォローしてくれる。

そして、鶴見ラウンジにきている生徒たち、彼・彼女たちは、大げさかもしれないが、私の価値観を変えたキーパーソンである。彼・彼女たちは、社会の「分断線」によって、今までの私がつどってきた「レール」に登場してくることはなかった。フィールドワークを始めた当初は、生徒たちを「助けてあげる」そんな姿勢が少なからずあった。しかし今は、むしろ助けられている。私よりも「想像力」がある、そんな気がする。

ゼミ生と、生徒たちが共鳴し合って作り出すラウンジの空気感は、独特であり、特別である。今までに、こんなにも、他者を受け入れる空気をもつ場所には出会ったことがない。もし、私が弱い部分を見せたとしても、それを受け入れてくれる、そのような安心感によってある種の緊張が溶けた私が、他者を受け入れられるようになる、このようにして、私のプライドは崩れていくのだ。

最後に、塩原先生。1年生のときに受けた、先生が担当する社会学は、私にとって衝撃だった。当時、社会を批判的にみること、私が見てきた景色が、当たり前ではないと知ること、ある意味でカルチャーショックであり、最初受け入れられなかった。なぜなら、それは、私が見てきたような気がしたからだったのではないかと思う。自分が見てきたものが当たり前じゃない、と知ること、自分がしてきたことが、正解ではない、と、極端に言えば、私の無能さを思い知らされているようだった。しかし、春学期を終えた時、この授業を受けてよかった、と思った。当時は、その理由があまりわからなかったが、その感覚をきっかけに、塩原ゼミに入ることを決めた。その感覚は間違っていなかったと思う。塩原先生は、私たちの「当たり前」を崩してくれるし、そこで立ち止まったとしても、そんな私たちを受け入れてくれる（偉そうなことを言ってごめんなさい）。

現在就職活動を行っているが、「この会社に決めた理由は『人』です」、そんな決まり文句を幾度となく聞く。「本当に、入社前から『人』で判断できるのだろうか？」と考えることは多い。しかし、もし、今塩原ゼミに入ることを考えている学生がいるなら、入ってよかったと思えるような人たちが待っている、あなたを受け入れてくれる人たちがいる、と、自信を持って言える。

Friends Project 報告書

9期 小島和真

4月に川崎のふれあい館を訪れてから1年近く経とうとしている。今と4月を比べると2つの大きな変化があった。

1つはふれあい館での子供たちとの関わり方である。4月に訪れた時、僕も子供たちも互いに遠慮しているところがあり会話は少なく深く相手のこと走れなかった。それも9ヶ月も経つと子供たちも自身の深い考え方の核と呼べるようなことも話してくれるようになった。男子たちからはスキンシップ?ボディランゲージ?が、女子たちからはどぎつい冗談や鋭い言葉が増えた。体を鍛えているからさすがに中学生のじゃれつきには屈しないが女子の口撃はたまに屈してしまう。それも彼らが僕らを彼らの仲間の一員として認めてくれたからだろう。おにぎりやDクは僕がいないところで仲のいいサポーターとして僕の名前を挙げてくれたらしい。SややAクも毎回僕にじゃれついて来てくれて僕が忙しくて相手できないと拗ねてしまう。可愛い。特に仲のいい子がみんな男子なのは少し気になるが僕のことを受け入れてもらえられたようで嬉しい。初め、彼らとは上下左右よくわからない関係性だったが今ではすっかり斜めの関係になった。もちろん僕が斜め下である。なんやかんやで中学生には勝てない。

もう1つ変わったことといえば僕の彼らに対する考え方である。4月では僕は彼らのことを「外国にルーツを持つ生活保護受給者家庭の子」「学校で少し浮いてしまっている子」という認識があった。もちろん、それに関して表面的に同情的に考えていたりかわいそうだと考えていたりはしなかったが今思うと心のどこかで重ていたのかもしれない。今では全く思っていない。確かに彼らは外国にルーツを持ち生活保護を受ける社会的弱者なのかもしれない。しかし、そのようなことはそのこと関わって行く上で大きな問題ではないと思う。彼らには彼らの素晴らしい個性がある。1年間のフィールドワークで僕はこの大事なことに気づくことができた。

今週末に10期生の入ゼミ試験があるという。僕は行くことができないが男女問わず面白い子、特に僕の話し相手になってくれる奇特新子や一緒にふれあい館で子供達と遊んでくれるような後輩ができたらいいなと思う。

ちょうど 1 年前、私は何をこの先学びたいのか分からず思いあぐねていた。そうしているうちにゼミの 1 次試験が終わっていた。このように私は行動する前に考えすぎてタイミングを逃すことがしばしばある。ゼミに入ることさえ辞めかけていた時、友人と一緒に 2 次試験の説明会に行った。その時にたまたま行ったゼミが塩原ゼミだった。正直何を学びたいかという軸が自分のなかで定まっていなかったが、「授業」+「フィールドワーク」というこの 2 つの学びを通して、このゼミでなら自分のなかのこのもやもやは晴れるのではないかと思い、塩原ゼミに志願した。

実際入ってみると、同期の帰国子女の多さに驚いた。海外の話をする同期を横目に、話に入れず、ずっと日本で生まれ育った自分がマイノリティのような気持ちにさえ陥ったことがある。

鶴見よる教室でのフィールドワークが始まった。「外国にルーツを持つ中高生への学習支援」。フィールドワークを始めるまでは、一体どういう雰囲気フィールドワークなのか上手く想像ができなかった。フィールドワークを始めた当初、正直何から始めていいのか分からなかったし、中学生のみんなとの距離も感じていて、もどかしさを感じる自分がいた。持ってきた学校の宿題をやり、分からないところを聞かれたら教える。実に受動的な態度であったように思う。最初に感じた課題は、どうしたらみんなとの心の距離を近づけることができるのかということである。しかしこれは解決するために特段何かをせずともいつの間にか解決していた。毎週 1 回フィールドワークに行くうちに、気づいたら、勉強の相談だけでなく、私自身の相談もしたり、お互いのことを話し合えたりする関係になっていたのである。

また、フィールドワークを始めてから現在においても、「みんなのために自分は何ができるか」という問いを思い浮かべる時がある。私は鶴見のラウンジに来てくれた子達にしか勉強を教えることができないし、その教え方も全然質の良いものではない。そんな私に対しても、中学生のみんなは「ありがとうございます」と言ってくれる。その言葉にとっても救われるし、もっとみんなのために頑張りたいと思えるようになった。

今年度最後の授業で「なぜ受動的な自分に対するモヤモヤを抱えながらも、ラウンジの子たちのために頑張ろうと思えるのか」という問いが残された。自分なりに考えてみた結果出た答えは、“ラウンジのみんなにじんわりと愛着を持っているから”ということだ。当初から今まで「自分になにができるか」という問いを抱えていたと前述した。目先の目標で言えば「高校受験成功のために自分は何ができるか」という問いになるが、週 1 回しか関われない私が与えられる影響は小さいものであると思う。しかし、たとえ影響は小さくとも、それは無駄ではないと思っている。それは生徒からの「ありがとう」の言葉であったり、言語化するの難しいが、生徒の勉強する姿勢の変化から感じ取れたりするからだ。「自分に何ができるか」考えることも大切ではあるが、あまり考えすぎず、今は、私たち大学生を慕ってくれて、ラウンジに来てくれるみんなのために、「勉強を教える人」になったり、「一緒におしゃべりをする人」になったりしてみようと思う。

たまたま出会った塩原ゼミではあるが、ゼミに入ってから、授業やフィールドワーク先で自分が全く物事を知らず、視野の狭い考え方をしていたということに気付かされるなど、得た学びは大きい。おそらく他のゼミに入っていたら気づけなかったことの方が多いであろう。私と塩原ゼミとの出会いは偶然ではなく必然であったのかもしれない。

Friends Project 報告書

8期 奥田茉莉絵

6月にイギリスから帰国し、私自身の今年度のゼミ活動は夏合宿から始まりました。夏の段階では、市立川崎高校でのふらっとカフェが終了し、県立川崎高校での活動も始まっていない状態でした。私はフィールドワークに対して1年間のブランクがありフィールドも変わったため、1からのスタートでした。夏合宿では、県立川崎高校で行われる新しい活動のコンセプトについて話し合いました。しかし、私自身高校に訪れたことはなく、ほかのメンバーも学習指導に数回参加しただけで、市立川崎高校でのふらっとカフェを思い出しながら手探りで話し合いを進めて行きました。私は、市立川崎高校でのふらっとカフェでは、何もできずに終わってしまったという思いがあったため、今回はしっかりと生徒と向き合える場所作りをしたいという思いが強くなりました。

10月にスタートしてからまだ4ヶ月しか経っていないため、生徒たちとの信頼関係やカフェの運営もまだまだ改善すべき点は多くありますが、4ヶ月間の活動を通して学んだことは座学と情報共有の大切さです。

私は、昨年のゼミ活動では授業とフィールドワークを結びつけて考えることができず、それぞれ別のもので考えて活動していました。そのため、フィールドワークで感じたことや疑問が自分の中に溜まって行き、毎回解決せずに終わっていました。しかし、今年の活動では、グループでの議論の時間が多かったこともあり、授業で扱った文献とフィールドワークを紐づけて考えることが自然にできました。その結果、フィールドワークでの考え方も変わり、成長できたように感じます。

次に、県立川崎高校のカフェでは、毎回終了後にそれぞれが感じたことやその日の出来事を共有しています。この時間は私にとってとても学びの多い時間です。カフェで同じ時間を過ごしているにもかかわらず、全く違う視点で物事を見ている人がいることや、生徒のちょっとした言動から様々な事情が隠されていることを教えてもらうなど、自分にはなかった考え方に毎回驚かされ、多くのことを学びます。話し合いの度に、小さなことも見逃してはいけないと感じるので、この時間はこれからも大切にしていきたいと感じます。

10月に始まったカフェには毎回約60人の生徒が訪れ、徐々に生徒もカフェを居心地の良い場所としてリラックスして利用してくれるようになりました。一方で、大学生スタッフが飲み物やお菓子の配布ばかりに時間を割いてしまい生徒とのコミュニケーションが減ってしまったこと、以前は頻繁に来てくれていた生徒がなくなってしまったこと、お菓子を大量に取って行ってしまう生徒がいることなど、課題も多く残ります。今年度のカフェは残り数回となってしまいましたが、カフェのあり方についても一度考え直すことで来年度からのカフェに繋げていきたいです。

Friends Project 報告書

9期 須藤和子

私がこのゼミを選んだ理由の一つは、「自由に自分の研究したい内容を研究できる」からである。フィールドワークに関しては、「なかなか社会に出たらできなさそうなことだし、他のゼミではできなさそうな体験になりそうだからやってみよう」ぐらいに考えていた。最初は鶴見国際交流ラウンジを希望していたが、自分の時間割の水曜日が空いていたことから県立川崎高校でのフィールドワークを始めることとなった。フィールドワークは、6月中旬になるまで始まらなかった。4月からその間、違う場所でフィールドワークを始めていたほかのゼミ員は、そこで学んだことをどんどん普通の授業に反映させていっていた。なかなかフィールドワークが始まらなかった自分はなんだかそれが羨ましく、他の人々より何歩も遅れているような気がした。「ナナメの関係」など、その時の自分には実感できない言葉が出てきたり、何より、もともとゼミの同期に知り合いがいなかった私は、他のフィールドワークでゼミ員同士の中が深められていっているのを見て、取り残されているような感覚に陥った。そんな気持ちを抱えていた頃、県立川崎高校のメンバーで集まることが増えていった。人数は自分含め3人と少なかったが、不思議ととても居心地の良いものだった。秋からの活動がとても楽しみになった。

9月になり、Me-netの高橋さんや、村田さん、そして8期の先輩方とともにカフェ活動が本格的に始まった。最初のころは、生徒の輪にどんどん入っていき声をかけていく他のメンバーを横目に、楽しそうな高校生たちを邪魔するのが怖かった私は、なかなか一步を踏み出せず、カウンターの中に留まっていた。しかしながら、動かせなかった足は県立川崎高校の生徒たちの優しさ、賑やかさにより徐々に和らいでいき、一緒にゲームで遊んだり、廊下で名前を呼んでもらえるまでになった。同じ空間にいただけで、青春のお裾分けをしてもらっているようだった。その中でも、定時制の高校生たちと触れ合うことは何よりも新鮮なことであった。生徒の中には、少し見た目が怖い男の子などもいた。そのような人は自分の学校にも、そして家の近所でも見かけたことがなかったので身構えていたが、話してみるといたって普通の、優しい、高校生だった。このゼミに入らなければ踏み入れることのなかった分断線の向こう側の人々と接し、そこで得た感覚は、これからも私の貴重な財産になっていくだろう。心の中で凝り固まっていた何かが溶かされた私は、そこから積極的に他のゼミ員とも関わるようになっていった。今ではかけがえのない大切な仲間である。あの時ひょんなことから県立川崎高校に行くことになったことも、私が塩原ゼミを選んだことも、すべてが良い選択だったと思っている。

Friends Project 報告書

9期 佐々木 希

留学していた関係で今年度12月に「入ゼミ」したということもあって、手探りの状態で終わってしまいました。ゼミという、日吉で受けてきた授業とは形式の大きく異なる少人数の授業に慣れ、ゼミ生の顔と名前を覚え、先生と話すたびに緊張し…ということをしているうちに気がつけば今学期最後の授業になっていました。春学期、秋学期で重ねられた議論と、そこで深められてきた考え。そして秋学期最後のまとめに入っていくゼミに、ある意味で何も知らない「転校生」のような状態で入っていくのは、非常に気後れしましたし、今でもまだそんな気がしてしまいます。そんな中でも確信していることは、私のゼミ選びが正解だったということです。ゼミ生たちの授業に真面目に取り組む姿勢や、フィールドワークについて真剣に考える姿を見て、ひしひしとそう感じました。

他の生徒たちが様々なことに気づき始める段階に入っていく中で、私には経験も、座学も足りていません。みんなが発表をしていることを、理論上は理解できても、それは私にとってあくまで言語の知識としての域を超えることはないです。さらに、みんなが「実際は正しくなかった」と振り返る今年度四月の時点でのゼミ生、それが私なのです(流石に五月くらいには進んでいるといいのですが…)。私ができることは、今、他の学生が発表していたことがどういうことなのか(自分で気づいていくことが理想的だったのかもしれませんが、先に授業中に聞いてしまったので…)もう一度考えるとともに、これからのゼミの活動で多くのことを学び、またフィールドワークで経験を積む中で、自分自身の考えを持つことだと思います。他のゼミ生が言っていることを「こういうことだったのか」と理解する瞬間もあるでしょうし、「いや、私はこうだと思うな」と違う感じ方をすることもあるでしょう。

初めて2ヶ月しか経過していないのに、まとめを書くというのはとても不思議な気持ちです。むしろこれからどんな気持ちでゼミの活動をしていくか、ということを書かせていただきました。先に行く同期のゼミ生には、いつまでも追いつけないのかもしれませんが、それでも、一生懸命、できる限りのことをして、「私も塩原ゼミの9期の一員です！」と胸を張って言えるようになる、それが来年度の私の目標です。

Friends Project 報告書

9期 椎野真帆

どのゼミに入ろうか考え始めた当時、「フィールドワーク」に取り組んだことがなかった私は、それがどのようなものなのか分からなかった。しかしその分この経験は何か自分の中で変わるかもしれない。そんなことを考えながら、現在とは違うFW先ではあるがふらっとカフェの見学に行った日がとても懐かしい。その時は何も分からずただただ笑顔で女子6人組の話の中に入り、過ごした。良くも悪くも何も考えていなかった。

私は今までの経験で、相手の話を聴くことが好きで得意だとすら思っていた。それは何かと人の相談事に乗る機会が多かったことと、人の先頭に立つ機会があっても相手の意見を聴いて決断を下すことが多かったからである。しかしFWに参加しはじめた大学3年の間に私は胸を張って「相手の話を聴くことが好きです。得意です。」と言えなくなった時期がある。

何も知識のない「私」と知識を得た「私」。2つの自分がこの1年間に存在していた。知識のない「私」は相手から何かを引き出さないとFWノートが書けないという考えが頭の片隅にあり、お互い会話をするより、相手のことを知るために質問して話して、ぎこちない会話が多かったと思う。相手の話を聴いているという事実はあったが私が好きだと思っている「話を聴く」姿勢とはまた違い、漠然と嫌な気持ちになった。これが本来の「相手の話を聴くこと」なのだろうか疑問に感じていた。

知識を得た「私」は「必ずしも相手の役に立つことが全てではない」と考えるようになった。漠然とした嫌な気持ちのままに「相手と対等に話すことができていない」「何か役に立つことを言わないといけないプレッシャー」から生まれるものだと分かった。その後は純粋にラウンジのみんなと交わす会話は友達と話すことと同様に楽しんでいた。お互い好きなことやハマっていることを話したり、学校生活やバイト生活の話をしたりと無理やり相手を引き出そうとするのではない。その分ふと本音や今考えていること、悩んでいることを話してくれる子もいたため、それを感じ取るアンテナはそれまで以上に張っていたと思う。

また私は大勢の中で声を張って話題を提供したり発言をしたりすることが苦手である。どちらかというとも少数でゆっくり話すことが好きだ。そんな私の性格を活かした場面もラウンジ活動中にあった。みんなの前ではうまく話せない子とじっくりと二人で話す機会があり、その経験が相手の話を聴くことに対して自信を無くしていた私を変えてくれた気がする。

最後にラウンジの経験だけではなく、ゼミ活動全般を通して私の短所を含め受け入れてくれたゼミ生の皆さん、塩原先生には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。私は塩原ゼミの空気感がとても好きです。1年間ありがとうございました！来年度もよろしくお祈りします。

Friends Project 報告書

新井 真帆

私は文学部で社会学を専攻しており、ゼミに入る前から、社会学を勉強していた。その中で、社会学とは“あたりまえを疑う学問”だという認識を得た。しかし、私は、この“あたりまえを疑う”を疑いなしに受け入れていたところがあったと考える。

私のフィールドワーク先は県立川崎高校であり、他のフィールドと比べると、ほぼ1からスタートした。準備期間を長く取ることができた一方で、高校生に最初に接した、6月の期末試験前の補修教室では、正直、苦い思いをした。教室全体の空気がぎこちなく、“ここは何をする場所なのか”“私たちは何をすべきなのか”“そもそもいる必要があるのか”という疑問にぶつかった。

8月のゼミ合宿では、補修教室の反省をふまえ、カフェをどのような場所にするかについて、ゼミのメンバーと話し合うことになった。結果、勉強ベースではなく、高校生が好きなことをしてくつろぐことができる場所にしようという方向性になった。

10月1週目には、横浜総合高校の“ようこそカフェ”を見学させていただいた。そこで、家庭内での虐待に苦しんでいる女の子と出会い、キャリアカウンセラーの方と共に女の子の話を聞くという機会を得た。女の子の話の内容は私にとっては衝撃的なものであり、自分自身の“あたりまえ”が揺るがされた。また、“ようこそカフェ”がはじまってから一定の月日が経っているからこそ、女の子はカフェを居場所と感じ、悩みを話してくれたのではないかと考えた。「県立川崎高校のカフェも、時間をかけながら高校生の居場所となれば良いな」と、“ようこそカフェ”見学を通じて感じた。

10月2週目からは、県立川崎高校で“ワールドカフェふらっと”に関わっている。カフェは、高校生が好きなことをして過ごせると同時に、大学生と高校生が気軽に話せる環境となっているように感じられる。また私にとっても、カフェは、行ったら元気になれる“居場所”となっている。このカフェの立ち上げに参加できたことは幸運であったと感じる。一方で、悩むこともある。例えば、高校生が好きなことをしているからこそ、そこに自分が入るのが怖いという感覚がある。今後は、時間が経つにつれて、カフェという場所が、私自身が、そして高校生がどのように変化していくのかについて、注意深くありたいと考えている。

“あたりまえを疑う”とは何か。ゼミに入り、社会学は確かに“あたりまえを疑う”学問であるが、この“あたりまえを疑う”とは、ただ批判的に、無責任になることではない、ということを学んだ。また、経験知と、言語知の繰り返しを重ねる中で、自分の価値観を内省することの大切さについて学ぶことができた。私の今後の人生の中で、“真摯さ”あつての“あたりまえを疑う”を、実践していければ、と考える。

Friends Project 報告書

9 期 加藤咲月

思えば高校時代の私は、何かに取り憑かれたように勉強ばかりしていました。そうしなければ授業についていけなかったし、そもそも勉強すること自体苦ではなかったからです。ですが正直に言うと、心の底から、勉強して少しでもいい大学に行かなければ、幸せな未来なんてあるわけないと思っていたのが一番だと思います。そしてそうやって自分が進んでいる道を正しいと信じて疑わなかったし、それだけならまだしも、そんなの絶対にありえないと他の道を否定したり、排除したりする気持ちがあったと、今なら言えます。

この1年間、私は2つのフィールドに関わりました。鶴見よる教室では外国にルーツを持つ中学生、ふれあい館では生活保護受給世帯の中学生の学習支援を自分なりに精一杯やってきたつもりです。そこで私は今までの人生、そしてひょっとするとこれからの人生においても関わることのなかったかもしれない様々な人と出会いました。自分と全く異なるバックグラウンドを持つ彼らに対して最初は「私とは違う」と身構えていましたが、いざ接してみると「なんだ、私と変わらないじゃないか」と感じるものがたくさんありました。一方で、そのバックグラウンドゆえに抱えている問題を目の当たりにすることもあり、特にふれあい館では中学生が話す何気ない一言や事情にショックを受け、何をしてもそのことしか考えられなくなってしまったこともありました。本当に、色んなことを感じ、考えた1年でした。

さて、この報告書を執筆するにあたり、1年間のゼミ活動を経て私自身変わったことは何か、自分なりに考えてみました。答えは思ったよりもすぐ出ました。というか、振り返ってみて、ではなく、活動しながら、自分自身で感じていた気がします。それは、自分のものさしが伸びたり縮んだり、常に形を変えているということです。高校生の頃あんなに正しいと信じていた道は、別に正しくなんかなかったです。こう言ってしまうとなんだかあつけないですが、だからといって間違っていたとも思いません。ただそれは「絶対的に正しいもの」ではなく「数ある選択肢の中の一つ」にすぎなかったんだろうな、と。自分とは全く違う生き方をしている人を羨ましいと感じるようになっていたり、過去の自分の言動を深く反省したり。そして何より、あの頃感じていた他の道を否定し排除する気持ちは今の自分の中にはありません。たくさんの人との出会いの中で、この「価値観のゆらぎ」を得られ、それが今なお続いているということがこの1年の一番の収穫だと感じています。もし塩原ゼミに入っていなければ、価値観がゆらぐことはなかったかもしれないし、だとすれば、私は相当「イヤな奴」になっていたんじゃないかな、と思います。そうなることを阻止してくれたのは、紛れもなくこの1年私に関わってくれた「みんな」です。「最近どう？」といつも気にかけてくれる彼、「ねえ新曲聴いた？」と共通の趣味の話で盛り上がってくれる彼女、「咲月なら絶対大丈夫だから」と背中を押してくれた彼、「お前それは絶対ダメだよ」と朝まで飲みながら怒ってくれた彼、「そういうとこ、私と似てて安心する」と笑って励ましてくれる彼女、「おい加藤！」といつも生意気な彼も、早いもので春から中学2年生です。みんな、本当にありがとう。

この先の1年も、2つのフィールドで、精一杯中高生と向き合っていきます。1年後の自分は何を思うのか、今から楽しみです。

Friends Project 報告書

8期 荒木麻友

塩原ゼミに入ってから、いつの間にか2年が経とうとしている。昨年度は定期的にラウンジに通っていたが、今年度は就職活動や部活動によって思うように参加できず、1年を通して数えるほどしか行くことができなかった。昨年度の Friends Project 報告書において自分で立てた目標、「楽しいおしゃべりだけでないコミュニケーション、踏み入っていい場所の見極め」も達成できなかった。よって、数回しか行けていない中での報告になるが、昨年度との比較から気付いたことが1つある。それは、久々にラウンジを訪れた時の居心地の良さだ。正直なところ、最初は久々に訪れるということで、皆が自分のことを覚えているか、また出会ったばかりの頃のようにぎこちなくなってしまうのではないかと、胸の中に不安があったのが事実だ。しかし、久しぶりに訪れたラウンジや久しぶりに会った中高生のみんなは決してそんなことはなくて、特に違和感を感じずに自然に入って行けた。それは、みんなが私に対して変に距離を置かず、自然体でいてくれたり、以前は自分からはあまり話しかけて来なかった子が積極的に自分に話しかけてくれたりと、ラウンジにいるみんなが自分に対して温かく迎え入れてくれていたからであった。また、自分自身としても、昨年度の最初の頃は周りの顔を伺いすぎて緊張したりしていたが、今は（周りを見ることは必要ではあるが、）自然体で落ち着いていられるようになったりと、昨年度から今年度にかけての変化があった。このことから、昨年度は大学生として居場所を作る側であるという認識のもと取り組み訪れていたラウンジが、今では作るというよりも、既にそこにある居場所の1つに変わっていることに気付いた。また、それは大学生だけではなくて、昨年度関わってきた中高生のみんなによって作り出されている、生み出されているものであり、そこには居場所という空間的なものだけではなくて、人と人の繋がりという本当に大切に、目に見えない心理的なものが存在しているように感じた。

私は塩原ゼミでの2年間で、多文化共生等の社会学に関するものはもちろん、対話の重要性まで、本当にたくさんを学んだ。それは、ただ本や講義から学ぶ学術的なことに限らず、実際に活動したり対話することで身をもって学んだことも多い。加えて、私の所属していた部活動は体育会の中でも部内の話し合い、対話を重視する部活動であり、4年間の活動を通して人との繋がり大切さ、そして自分の原動力の1つは自分を支えてくれる人々の存在であるということ強く感じた。自分の大学生活は、総じて、人との繋がりによって構成されているのではないかとさえ思う。社会に出て、塩原ゼミでの活動を含め、この4年間で学んだこと、得たものを大切にしていきたい。

FP 報告書

31463283

8期 吉川瑞穂

毎週土曜日、ラウンジに来てくれる生徒たちや FWC のみんなに会うのがいつの間にか私の 1 週間の楽しみになっていた。ラウンジに行き始めたころは、正直「ぜんっぜん時間進まないじゃん！」と思いながら時計をチラチラ見ていたのも、今は「もう 17 時だよ〜片付けて〜」と言われて時間に気付く始末である。みんなとおしゃべりをして、ゲームをして、楽しすぎて時間を忘れてしまって、ときどき電車の中で自己反省会をして、「今日も楽しかったな〜」とニヤニヤしながら東横線に揺られて帰る、そんな毎週土曜日の夜だった。あっという間の 2 年間であり、もちろんこれからもラウンジには行かせて頂くが、現役の大学生としてはラウンジに訪れることができないことを実感し、「時間が足りない」という言葉の本当の意味を知った気がする。まだまだみんなと色々なことを経験し、考えや感情を共有していきたい…！と切なく感じる今日この頃である。私にとってこのような、とっておきの「居場所」を作り出してくれるみんなは、私の大学生活 4 年間のうちで最も濃密でディープな時間を共に過ごした大切な仲間であり宝物である。生徒たちはみんな個性豊かで、「大人」で、私なんかよりもずっと周りを見ていて、一緒にいて楽しい人たちばかりであった。またイベント時など、少ない大学生の人数をカバーするように、生徒たちが積極的に参加して手伝ってくれた。言葉にすると簡単に聞こえるけど実行すると結構大変なイベント企画だが、準備から後片付けまで、生徒たちが的確な指示を出しながら手伝ってくれたおかげでなんとか楽しく終わらせることができた。ゼミのみんな、特に同期は優秀な人たちばかりで、色々なことをしっかり考えられていて、私は「確かに！そこまで考えられていなかった！」と思わされるばかりであった。フィールドについても、何か気になることや不安があればすぐ相談できたし、的確なアドバイスをくれる仲間たちだった。

私は最初から最後まで結局、とりあえず明るく笑っとけ！精神できてしまったが、そんな私を温かく優しく仲間として接してくれた 8 期のみんな、時には私をいじり倒しながらも色々な悩みや相談に心身に乘ってくれた大切なラウンジの生徒たち、そして、熱心にたくさんのことをお手伝いしてくださった松井館長、カミルさんを初めとするラウンジのスタッフの皆さま、アメなのかムチなのかかわからない言葉を投げかけるけど、本当はとっても優しい塩原先生…塩原ゼミに入れてなかったらどうなっていたのだろう…と恐ろしいくらい、本当にこのゼミに入って(入らせて頂き笑)よかったです。

2 年間本当にありがとうございました！

Friends Project 報告書

9期 今井 絢梨

1年前のこの時期、たくさんのゼミの説明会に足を運んでいた中で、フィールドワークを活動の中心とする塩原ゼミは特徴的、また異色で、強く惹き込まれたことを覚えています。もちろん国際社会学そのものに興味もありましたが、フィールドワークというものになぜそこまで惹き付けられたのか、当時の私にはうまく言葉にすることができませんでした。ただ自分の直感だけを信じ、入ゼミを希望しました。

それから右も左も分からずに活動を開始した4月、フィールドワークは「研究のための実践、調査だ」と思っていたので、多くのことに気づかなければと焦っていたことを思い出します。先輩や同期のフィールドノートを読むたびに鋭い観察力や考察に刺激を受け、私も頑張ってフィールドワークをしなければと考えていました。

しかし回を重ねるうちに、よる教室にいる自分はむしろ自然体になっていく感覚がありました。来てくれるみんなと勉強し、話し、笑ううちに頑張るという感覚は忘れていきました。ゼミの授業や議論の中で知識を得たことに加え、フィールドワークは「頑張る」ものではないと、自然体で彼らに接しながらありのままの姿で関係を築くものだと気付いたのだと思います。自然体の関係を築いていくうちに、私自身が彼らに話を聞いてもらう時もありました。そうやって彼らひとりひとりと距離が縮まってきた中で、彼らの悩みには寄り添いたい、夢は応援したいと思うようになりました。フィールドワークというのは、新たな気づきを得たいというよりもひとりひとりと出来るだけ真摯に向き合いたい、その思いがあって初めて意味があるものなのだと今では思います。では真摯に向き合うとはどういうことか？ 目指すべき対話とは？…答えの出ない問いに対して、まだまだ模索し続けていかなければと思います。

活動を通じて私は以上のことを考え学んできましたが、きっと他の同期はまったく違った視点を持っているのだろうなあと思っていて、どんなことを学んだのかとても気になっています。塩原ゼミはそれぞれが独自のスタイルを持っていて、それでいて押し付けることなくみんながみんなを受け入れてくれる、とても居心地が良い場所だと実感した1年でした。1年前に直感として感じた魅力は、ゼミ生がお互いに協力し合いながらも、それぞれの形で学び取ることが出来るという心地よさだったのかもしれない。今年度のお会いや得た学びを大切にしながら、来年度も学びと実践を繰り返していきたいです。ありがとうございました。

Friends Project 報告

9期 大塚愛

振り返ってみれば、私が塩原ゼミに入ったきっかけは、自身が帰国子女であることが大きかったと感じる。幼少期から海外に住み、マイノリティとして暮らしていたことが、このゼミでのフィールドワークで少しでも役立つのではないかと。自分にしかできないことがこのゼミではできるのではないかと考えていたためである。様々な国籍の人と接してきた自分は日本にずっと住んでいる人に比べたら異文化に対する偏見も少なく、また、視野も広く、固定概念にとらわれず接することができるのではないかと考えていた。しかし、実際に毎週鶴見のラウンジに通うようになると、自分の経験を活かすことよりも、自分が海外で置かれていた状況と日本に住む彼らが置かれている状況がいかにか違うのかということ、そして、マジョリティ側に立って彼ら・彼女らと接することの難しさを痛感した。

鶴見よる教室に参加し始めてから春学期の間はラウンジのみんなと距離を縮め仲良くなることを意識しながら行っていた。秋学期になると、担当している中学三年生の受験を意識するようになり、週1で学習支援を行うことの限界を感じ、自分たちのやっていることに意味があるのか、そもそもそこに意味は必要なのか、モヤモヤしていた。たった週3時間しか接触していない私たちが思春期の彼らに対して、どれほど干渉していいのかかわからず、受け身になってしまう場面が多々あったように感じる。

また、どこか自分との間に線引きしていた彼らが、実は自分と同じような悩みを抱えていたり、逆に、自分の親と話す言語が違うために会話ができないなど今まで想像もできなかった困難を抱えていたりするなど、衝撃や発見の連続だった。開始当初は「勉強を教える」立場であったはずにも関わらず、逆に私が「教えてもらっている」ことも多く、こんなに無知である自分が彼らにアドバイスしていいのか、自分の中で葛藤があった。しかし週3時間であっても、1年間続けていると、中学生たちも私たちに対して悩みを打ち明けてくれたり、将来について相談してくれたりするようになった。こんな自分でも頼りにしてくれているという彼らからの反応は、以前に増して責任を持ちたいと強く思うようになった。

塩原ゼミでの1年間の活動を通して、自分の強みだと思っていたことが覆されたとともに、「(自分は向いていないと思っていた)人をサポートすること」にやりがいを感じる、という自分の新たな一面に気づくことができた。大学に入ってから自分が何をやりたいのか分からなかった私は、塩原ゼミと出会い、本当にやりたいことを見つけられた。塩原先生、8

期の先輩方、9期のみんな、ラウンジのみんな、1年間本当にありがとうございました。来年度もよろしく願いいたします。

Friends Project 報告書

-1 年を振り返って-

8 期 佐藤志菜乃

三年次に塩原ゼミに入り、現在に至るまで、先生の授業や二つのフィールドワーク先、卒業論文を制作する中で非常に多くのことを学び、経験することが出来た。ここでは、この一年で特に印象に残っている二つの思い出をあげながらゼミ生活を締めくくりたい。

○元フィールドワーク先、市川の生徒たちと

就職活動が終わりひと段落した7月、市立川崎高校の生徒達に会いに行った。久しぶりに高校を訪れ緊張気味の私であったが、毎週よく来てくれていた生徒たち数名が集まってくれた。会うのは半年ぶりくらいだったが、集まった子達が自由に話す雰囲気は、教室はないものの昔の「ふらっとカフェ」そのものであった。学校から駅までの帰り道では、進路に悩んでいた四年生の女の子の話聞いた。進路先の詳しい制度や学費などは分からなかったが、自分なりにその子の悩みと向き合おうとした。活動を始めたばかりの頃は自分の経験していないことや分からない専門的なことだと、一歩引いてしまうところがあった。もちろん制度的な面では、高校の先生やコーディネーターの方との連携が大事であるが、生徒の為に自分も何かしてあげたいという気持ちだが、活動を始めた頃より強まっていることに気が付いた。そして、久しぶりに会っても気さくに話しかけてくれ、笑顔で迎えてくれる生徒の優しさを感じた。ふらっとカフェでの生徒達との出会い、そして生徒たちから学んだことは私にとって、かけがえのないものである。

○夏合宿にて

去年の夏合宿では、各フィールドワークごとに話し合う時間があり、そこで私達はこれからスタートする県川のコンセプトや方針を考えた。ちょっとふざけ合いながらも「ふらっと立ち寄り、ガチッと楽しめ、ぽろっと不安をはきだせる」「ワールドカフェ」というコンセプトが決まった。市川の時もそうであったが、活動を行う上でスタッフ同士のやりやすさは非常に大切だと考える。県川でのカフェ活動は約15回目を迎え、まだ生徒達と深い関係を築けているとは言えないが、あの教室にゼミ生5人、院生の方、村田さんがいる空間はすでに私にとって居心地の良い場所になっている。「居心地の良さ」は生徒たちにとってそれぞれ違い、お菓子を貰える場所としてだけでなくカフェを必要とするタイミングもそれぞれ異なると思う。県川でのカフェ活動が今後も続き、生徒たちと繋がりを持ち続けるカフェであって欲しいと思う。

「想像力を働かせること」、「自分が正解だと思っていることが必ずしも相手にとって正しいとは限らないということ」。塩原先生から教えて頂いたことは沢山あり、塩原ゼミでしか学べないことは多くあった。これから社会人になり初めに求められるものはまた少し違うかもしれないが、社会の一員として生きていく上でとても大切なことを塩原ゼミで学ぶことが出来た。これらは私の誇りであり、一生忘れずに心に留めておきたいと思う。塩原先生、そしてゼミの皆さん本当にありがとうございました。

Friends Project

宮澤 康弘

まず、なぜこのエッセイの名前が「Friends Project」というのか、私は甚だ疑問に感じた。日本語に訳すと「友達計画」という意味である。「友達」とは何なのであろうか。私は普段、友達という言葉を意識せずに使用していた。しかし、その言葉の定義を良く理解していない。そのため、まず友達の定義を調べることから始めた。goo 辞書によると、友達とは、互いに心を許し合って、対等に交わっている人と定義している。この定義に当てはめると私は真の友達と言えるような存在に出会っていないような気がした。なぜなら、私は常にどこか人と接するときに見えない壁を意識していたからだ。しかし、その壁は今では感じなくなり始めた。その私の現状を壊すきっかけをもたらしたのがゼミの活動である。私は、鶴見をフィールド先に選んでいたが、当初はその生徒のみならず、ゼミのメンバーにすら心を閉ざしていた。私の表情からはそうした雰囲気を感じられなかったであろう。しかし、一年間という時間的要素と「鶴見夜教室」や「ゼミの教室」といった空間的要素が加わることにより、私の壁は崩れ始め、今では跡形もなく消えてしまった。

今なら分かるような気がする。なぜ、私が「Friend Project」という言葉を疑問に感じたのか。それは、友達という定義が私の中で変容したからであろう。

「内省」を繰り返した産物である。「内省」をすることにより、友達という定義が更新された。みんな友達。隣のおじさん、おばさんも。みんな友達。これは気が狂っていると取られてもおかしくない。一種の比喻のようなものである。つまり、周りの人を友達のような「思いやり」をもって接することができるようになったということを言いたいのである。

これは、今後生きていく中でも、貴重な能力である。それは、学力のようなアカデミックなものではないかもしれない。しかし、人としては大切なものである。この気持ちを忘れずにしたい。

Friends Project 報告書

天野真衣

最近、なんで川崎まで FW しに行っているの？と聞かれることが増えました。特に今年は秋学期から欠かさず行っていたからかもしれません。そのときは何も考えずに「責任感」と答えていました。何かしっくりこない気もしていたけど、確かに人手が余っていたわけでもなかったし、今年は受験生を担当していた、のでわたしが行かなきゃという意識もありました。

でもよく考えてみると、今年は去年からの生徒を続けて担当していたから、もっと仲良くなれて、彼女たちとの時間が楽しかったんだろうなと思います。去年は一時期 FW に行つて生徒たちと何を話せばいいんだろう、と考えていたのですが、今年はそういう悩みみたいなものもなく、ただ行けば自分たちから積極的に話をしてくれるようになったり、何を勉強するかも一緒に考えられるようになったりしました。まだまだ生徒同士でしゃべっていたりすることもありましたが、去年に比べて会話が增えたとし、入りにくかった生徒同士の会話の中に私も自然に入れるようになりました。一月に入ってから、話しにくいような家庭の話もしてくれ、また、いままでのような「先生」ではなく、名前で呼んでくれるまでになりました。いままでずっと「先生」と「生徒」のように認識されていたのが、少しだけでも彼女たちの「友達」に近づけたことはわたしの中で大きな進歩でした。そういう小さいことの積み重ねがわたしが FW に行っていた理由だったと思います。

この約2年間のゼミや FW を通して、「他人」について考えることが多くなって、知ろうとする気持ちが強くなったと感じました。自分と似ていると思った人でも全然違う部分があったり、自分とは一つも共通点がないと思っていた人と共通点を見つけたり。「自分のあたりまえと人のあたりまえは違う」ということを体感できた2年間でした。迷ったり難しいと感じることもあったけど、それもすべて「自分以外の人を知る」ためのいい経験だったと思います。大学生でこのような貴重な体験ができて、本当によかったです。塩原先生、ゼミのみなさん、ありがとうございました

Friends Project

1年間を振り返って

経済学部3年6組

松本翔太

*この1年間における自分の成長を、客観的視点の極地から考察いたしました。

【入ゼミ前】

彼の周囲は厚い防壁に覆われていた。数年前、彼は自らの防御力を高めるために、自分と他者を隔てるこの防壁を造り、この壁の中で独りよがりの妄想に耽っていたのであった。彼と他者との関係の一切は、この厚い壁を一枚介して行われたから、いかなる他者の声であったとしても、それが彼の耳に届くことはあっても、彼の心に届くことは決してなかった。彼には、「想像」も「対話」も必要なかった。

退屈な生活ではあったが、しかし彼がこの壁の中の生活を不幸に感じたことは一度もなく、むしろ幸福にすら感じていた。彼には自ら「変わろう」とする意志も、他者を「変えよう」とする意志もなかったから、傷つくことがなかったのだ。彼は、例えるなら「井の中の蛙」であったが、「井の中の蛙」が、必ずしも常に不幸であるとは限らないのである。彼は、まさに「大海」の存在を知らないという理由によって、安全であり、傷つくことがなく、彼にとってはこの防壁の中が「安住の地」であったのだ。

【入ゼミ後】

彼は裸になった。かつて彼の周囲を覆い、彼を守ったかの防壁は、この一年間の諸活動の衝撃によって、徐々に崩壊した。防壁から出てきた彼は、さながら「第二の誕生」を遂げたばかりの幼子であり、非常に脆かった。このようにして、防御力を失った彼には、生身のままでは命の危険があったから、武器を手に入れるなり、再び防壁を造るなりして、自らの身を守る必要があった。言い換えれば、自ら「変わろう」とする意志を持つことを強いられた。防壁を介さない他者との関わりによって、彼は傷つくことを避けられなかったが、彼をこのように「大海」へ突き出した塩原ゼミが、彼を見捨てることはなかった。塩原ゼミは、負傷した彼の傷を癒すだけでなく、彼に数々の武器を与えた。もっとも、それは攻撃するための武器ではなく、守るための武器であり、考えるための武器であり、和解するための武器であった。そして、これらの武器の全ては、1年間の成熟を経て、「変わることへの意志」にその顔色を変えた。

【現在】

思うに、「答えを出すことを良しとしない」というこのゼミに通底する道徳は、答えを出す努力を放棄することを意味しない。これが意味するのは、私が防壁の中にいた時に実践していたことの逆の態度であり、言い換えれば、自分一人で導き出した答えを絶対的な答えとして認識し、その答えに安住することを認めない、ということである。

この1年間の諸活動を通して、私は自覚した。繰り返しアップデートされる電化製品のように、我々は周囲に応じて変化しなければならない存在なのだというのを。

出会いは、ある意味「自分を形作るもの」だと思っている。

ゼミ生、塩原先生、ラウンジのみんな……みなさんとここで出会えたことで、自分にとっての好きなこと、嫌いなこと、目指したいこと、悲しいこと、嬉しいこと、足りないこと、大切にしたいこと、どうでもいいこと、怖いこと、ドキドキすること、辛いこと、頑張りたいこと、もう書けないほど沢山のことに気付くことができた。昨年同様、個人的な思いを述べる。

例えば、論理的思考が苦手なこと。ゼミでの発表の話。

今年度のゼミでは、様々な理論をもとにFWで得たことと比較して発表する場が沢山あったが、その理論がどういう仕組みだとか、FWと比較するとアレが言えるとか、そもそもその理論って違う考え方ができるとか逆の発想はどうかとか、後から言われてなるほど！と思うことが多かった9期のみなさんや8期のラウンジメンバーは特に敵わないところも多く、悔しい思いもした。自分の中での考えは本当に正しいのかと疑ってみたり、物事を前から見るのではなく後ろから見たり横から見たり、叩いてみたりふたを開けてみたり(?)。進んでみたり戻ってみたり。知ること、そしてそれを更新することだけでなく、色々なヒントを使って絶えずいろいろな方向から見て自分の中で反芻することの大切さに気付けた。

例えば、他の人がもつ様々な表情や個性が本当に大好きで自分にとって大切なこと。主にラウンジでの話。変に気を遣うより、冗談を飛ばしたりリアクションをはっきりしたほうが、純粋に楽しい。その笑顔が見たい。嫌がりながらも真剣に勉強や試練に立ち向かっていくその目や、自分の将来の夢とかやりたいこととかを話すときのその声は本当に素敵で、自分のエネルギーにもなる。一緒に頑張っていこう、と手をつなぎたくなる。みんなの中心となるような頼もしさや人の表情の変化を瞬時に察知して声をかけに行く優しさは自分にはまだまだ足りなくて、こっそり目標にしている。自分にとってその人が好きか苦手かはちょっと関係するかもしれないけれど、いずれにせよその人の姿や表情、言動は、自分の中で何かを浮き彫りにし、気付かせてくれるのだ。

例えば、出会いがあれば別れもあることは当然なのに、やっと実感できて、でも全然自分の中ではまだ受け止められていないこと。そしてたまに怖くてどうしようもなくなること。これはどうしても書きたい。卒業して離れ離れになる別れとは違う。生き物だから当たり前のことなのに、今まで身近な経験はなかったから、驚いてしまったし、まだもやもやしているときがある。人生って何だろうなんて考えたこともある。生き物は永久のものではないのに、今こうやって勉強して、何かを達成させようと一生懸命頑張っていることって何につながっていくのだろうか、とか。今、こうやって少しずつ積み重ねている何かの意味って何だろうって考えてしまう。でも、上の2つや、他にもたくさんのに気付けたから、これからも人と出会い、何かを積み重ねていくことはやめない。顔を合わせて話をして、悩みを聞いたり目標を言い合ったり、支えたり支えてもらったり、笑ったり泣いたり、そうやっていく中で何かを積み重ねていくことが、どれだけ大切で貴重なことなのか、気付けた。いや再認識かな。今でもまだ、どうしても振り返ってしまうけど、でもそれでは前にも進めないから、大切に封筒に入れて、心の中の引き出しの端っこにしまっておくことにする。

この2年間、みなさんとの関わりの中で、沢山のことを知り、考え、気付くことができました。キリがないので3つくらいにします。振り返るとみなさんと出会ってからの一瞬一瞬が私を形作っています。ぜんぶ、ぜんぶが私を支えてくれています。

ありがとう、なんてたった5文字の言葉で表現するのはもどかしい。でも他の方法でうまく表現もできないのももどかしい。

Friends Project 報告ってなんだったっけ？ってくらいに自分の思いを書き連ねてしまいました。長い。

2年間このゼミで勉強し、過ごすことで本当に幸せでした。ぼくにとって、そのすべてが愛おしいです。

Friends Project

31560797 藤岡咲季

約一年前の入ゼミ選考で、先輩にある質問をされた際、私は「フィールドワーク先の生徒には自信を持って接することが大事だと思います。」と答えた。けれども改めて活動を振り返ると、私が学んだのはむしろ正反対のことだったのかもしれない。

フィールドワーク先の鶴見よる教室は、中学生の学習支援がメインの場だ。活動が始まった当初は「役割のあるボランティア」である以上、生徒に何かを与えなければならない義務を感じていた。

一方講義で学んだことはその逆だ。塩原先生がそこで繰り返していたのは、自分が他者からどれほどの影響を受けているか振り返りなさい、ということだった。それまでゼミに限らず幅広い活動の中で考えていたことといえば、誰かに良い影響を与えるにはどうすればいいか。何をしたらちゃんと結果を残せるのだろうかということばかりだった。気づけばこうした考えの主語はいつも「自分」で、確かに目の前にいるはずの相手の能動性を見過ごしていた。

フィールドワーク先の生徒たちと私たちは外国にルーツを持つか持たないかという違いがある。塩原ゼミに入る以上、そうした違いがあっても特別大きなことと捉えず、彼らと自然に接せられる自信があった。けれども自然に接することは、ただ仲良くできることに完結するものではない。表面上は仲良く歩み寄っているように見えても、主語が常に自分である限り、その態度は独りよがりのエゴになってしまうことだってある。しばしばそれは「〇〇してあげる」というように何処となく上から目線の態度になってしまう。誰かに影響を「与えること」と「与えてあげること」は大きく違うのだ。

どちらの場合も生身の相手を前にした時に意識することはほとんどないだろう。ただ後になって会話の流れや発言を一つ一つ思い出すとふと「あの瞬間、少し一方的な態度をとってしまったかな」と感じる時もあるし、あるいは「あの頃と比べて私の考えはここまで変わったな」と実感する時もある。塩原ゼミではこうして後から振り返るクセがついたように思う。加えて後者の「考えが変わったな」と思える瞬間も一年前に比べて少しは増えたであろう。座学とフィールドワークが両輪となり、かつての「自信を持って接することが大事です」なんていう発言が正しい意味で覆された。社会学という枠を越えて、もっと大事なことを学んだのではないかと思う。

来年度からは一年間休学するためしばらく塩原ゼミと離れてしまう。これまでたくさんのことを学ばせてくれたゼミに感謝すると同時に、次に帰ってきた時もゼミのメンバーやつるみのメンバーとまた楽しく活動できることを強く願う。

Friends Project 報告書

9期 久保絵理菜

私は一年間 FW、またゼミ活動を通してたくさんの壁にぶつかり悩むことが多かったなと思います。しかし、このゼミでは9期を中心として、同じように悩んで一緒に考えられる環境がある。それがなによりも素晴らしいことだったなと感じています。

例えば、FW では今後どのように活動していけばいいのか、私達には何を求められているのか、私達ができることはなんなのか。そんなことを一年間、最初から最後まで悩み、考え続けてきました。FW 後には、ほとんど毎回サイゼリアに行って反省を重ねる。最初は生徒の情報を共有し合うということが目的でしたが、最終的には毎回「私達のあり方」という議論で白熱することが多かった気がします。

印象に残っているのは「そんなに気負わずに生徒達と友達感覚で関わりたい派」「生徒達の勉強や進路にも責任を持ってしっかりと指導したい派」といった簡単に言えばこの二つでぶつかった時がありました。しかし、実際のところはこんな簡単に意見が分かっていたわけではなく、この裏には色々な想いがありました。結局、前期の期末プレゼンテーションで各々の考える FW や居場所について発表し合い、夏合宿でもう一度話し合うことにより、みんなの目指すものが明確になりました。

後期においては、ひとりひとりがそれぞれの生徒と関わるなかで、考えること、感じるものが異なり、漠然とした「私達はなにをしたらいいのか」という悩みから、より瞭然とした課題に向き合うことが多かったと感じます。それはやはり、生徒達との距離も縮まり受験が近付くなかで、「自分達は生徒達の進路や人生に何らかの影響を与える存在である」ということに気付き始めたからだだと思います。これに関しては、授業でも文献を通して議論することができ、自分の中の疑問や課題も少しずつ解決していくことができました。特に、プレゼンテーションの話し合いをするなかで、チームのメンバーに自分の考えていることをぶつけ反応を貰ったり、他のチームのプレゼンテーションで、解決の糸口を見つけたり、塩原先生のコメントで再び新たな問題を考えるきっかけとなったり、これらのことの繰り返しが自分にとって非常に大きな学びとなりました。

最後に、最終プレゼンテーションで、私達のチームは「限界を超え続ける必要」といったことを議論しました。塩原先生からは、全ての人が、このようにストイックに社会課題と向き合い行動できればいいけど、それは難しい。では、どうして難しいのか。なんで、私達は限界を超えなきゃいけないのか。ということを考える必要があるというコメントを頂きました。私も、もしこのゼミに入っていなければ社会の課題と直接向き合う機会もなく、自分から行動を起こすことは難しかったと思います。私達は、自分では気付かぬうちに社会の分断線により区切られて生活していて、一生それに気付かないことも大いにあり得る。特に、今後、全てが個人の選択に委ねられる時代（例えば、テレビや新聞ではなく、自分が欲しい情報だけをネットなどで選択するようになるなど）になると、こういった問題はより顕著になると考えます。当前かもしれませんが、「難しさ」を生む原因の一つには自分を取り巻く世界しか見ることができないといった社会構造の問題が関わっているのではないのでしょうか。また、「私たちはなぜ限界を超えなきゃいけないのか」ということについては、明確な答えは出ていません。なぜならば、現在私は生徒達と関わるなかで、未熟ながらそれを「義務」とか「やらなきゃいけないこと」だとは感じられていないからです。上手くいえないのですが、中学生だからとか外国にルーツを持っているからとか何も関係なく、関わるなかで生まれた絆だったり信頼関係が私の原動力になっているのだと思います。つまり、友達に対する感情に近いのかもしれません。まとまらないのですが、もしもこのゼミに入っていなければ、私の考えや価値観は今よりずっと浅く狭いものになっていて、そのことにさえ気付かなかったはず。また来年度も、先輩や仲間と議論を深めながら、より自分自身、成長していけるよう頑張りたいです。

～Friends Project 報告書～

31562426 森住大樹

2018年1月31日夜。僕はこの文章を書きながら、去年の今頃を思い出していた。“ゼミに入れたら、社会学についてより専門的なことを勉強するんだろうなあ”などと考えていた当時の懐かしい。一年間の塩原ゼミでの活動が僕にもたらしたものは、“ものの考え方のコペルニクス的転回”だった。「経験や知覚を通して自分の価値観を絶えず更新していくこと」、これはともすれば哲学的ともとれる内容で、生きていくための考え方の基本となりうるものであった。

この授業では、文献購読やグループプレゼンテーションをするときに、必ずしも答えを求めなかった。しかし僕は答えを出さなければ問題は解決できないと考え、プレゼンテーションにおけるグループワークでは問題（の所在）を設定した後、解決策または答えを暫定的に何通りか推考した。結論が出たものもあるが、出ないものも多かった。答えが出ない理由はなんといっても“知識不足”だった。例えば、人々が居場所に求めるニーズを調べるときには統計学や経営学の知識が多少なりとも必要だと思われる。社会学的な問題への答えの案を提示するためには、法学経済学その他の社会科学の知識が必須であり、自らの勉強がまだまだ全然足りていないと実感した。同時に、それらの学問をある程度身に付けた後でゼミで出てきた題目と対峙したとき、それがどのように見えるのか気にもなった。

ゼミ・FW活動を通じて、自分の関わる世界が広がった。居場所が増え、僕はより自分の社会的存在を感じるようになった。大学2年までの“家族”と“慶応義塾放送研究会”の2つの「場所」に加えて“塩原ゼミ”、“鶴見よる教室”、“県立川崎高校ふらっとカフェ”の3つの「場所」に所属することで、同年代の大学生だけでなく、鶴見では外国にルーツを持つ中学生、県立川崎高校では高校生、さらには元大手商社勤務のキャリアカウンセラーの方までと関わりをもつことができた。こんな貴重な経験ができるゼミは慶應でもこのゼミぐらいなのではないだろうか。多様な年代の人たちと交流することで思考や理解の柔軟性が広がる。彼らと話すとき、自らの中高生時代やまだ知る由もない2、30年後に思いを馳せたりするのである。文系の知識に即効性はなく、発酵するのに時間がかかる。「対話」「分断」「ナッジ」などについて議論したあれこれが、近いうちか遠い先か、役に立つ日がきますように。

○あとがき…1年間ゼミを続けてきたが、悩んでいる部分もある。僕はサークルにおいてはそれなりに仕事ができるという評価を一応もらっているのだが、ゼミにおける信用度はあまり高くない。ゼミでの信用が低めであることの原因としては課題提出が遅いといった実質的な理由もあるが、僕の“あまりしっかりしていなさそうな”見た目や雰囲気、つまり「イメージ」が大きなウエイトを占めると考えられる。僕は至らない面も多いが、受験勉強で培った数的処理能力や暗記能力、サークルでの映像制作で培った発想力には自信がある。これからの1年はゼミ生のみんなに対してもっと自分を知ってもらおう努力をし、みんなからよりしっかりとした能力面での評価を受けたい。

Friends project 報告書

佐久間 響

「結局そういうことやる人って、自分自身がそうされたいみたいなどころがあるじゃん。」これは輝さんの言葉です。居場所作りのようなボランティアにかかわる人を 3 種類あげてくださり、そのうち一つについてこのように言及していました¹。

僕はこの言葉が妙にじっくり来ていて、結局僕にとっての居場所作りは、自分自身の居場所を探す活動でもあったんだと思います。この 2 年間のフィールドワークを振り返ると、結局自分の卒論と内容が被ってしまうため、自分の卒論をそのまま引用します。

“ふれあい館は私自身にとって重要な「サードプレイス」であっただろうか。残念ながら、オルデンバーグの書いた定義には当てはまらない。あくまで学習サポート（同時にフィールドワーク）は「仕事」であったし、交通の便という面では、はっきり言って行くのが面倒くさい場所であった。

ただ一つ言えるのは、2 年近くにわたって行ってきた学習サポートとフィールドノート報告、その熱量たるや、明らかに「卒業までに必要な単位を取るため」という目的以上のものがそこにはあったということだ。オルデンバーグは第一の場を家庭、第二の場を生産的な仕事場、第三の場をインフォーマルな非生産的な場といった形で日常生活の経験領域を分類し、その三つ目を「サードプレイス」と称した。これに従って二つ目の経験領域を「セカンドプレイス」と呼ぶことにするならば、ふれあい館は私にとって、サードプレイスというよりは「第 2 のセカンドプレイス」であった。それでもそこは、第 1 のセカンドプレイス（勉強やサークル活動、ひいては就職活動）では得られなかった自信や自己承認欲求獲得の場であった。また学習支援の経験が、教育系の企業への就職を選択するきっかけになったり、就職活動では定番となっている「学生時代に頑張ったこと」を語るエピソードになったりするなど、自らの進路選択に影響を及ぼす経済社会的な価値があったことにも注目したい。第 1 のセカンドプレイスでは「弱さ」とされていた（あるいは、自分自身がそう思い込んでいた）私の一部分が、第 2 のセカンドプレイスでは「強さ」となり、それを受け入れてもらえる経験が得られた。全部とは言えないまでも、そうやって少しずつ、資本主義社会の中で「弱さ」を開示していけないものだろうか。”²

サークルやクラスでいまいちパツとしない大学生生活を彩ってくれたのが、ふれあい館や塩原ゼミでした。たくさんのお出会いに、心から感謝しています。

2 年間本当にありがとうございました。

¹ 佐久間響,2018,『桜本の子どもたちが生きる社会とサードプレイスの役割—川崎市ふれあい館の学習サポートを通じたフィールドワークから—』,P66

² 同上,p25-26.

Friends Project

フィールドワークを経験する前、私は「人のためになること」とは、何らかの手助けが必要な人に対し、より良い結果や変化をもたらすために手を差し伸べて協力することだと思っていた。そしてそのような定義の下、自分は出来る限り人のためになれる人間でありたいと思ってきた。足の悪いお年寄りに席を譲るとか、お医者さんが患者さんの命を助けるために手術をするとか、例は様々だが、漏れなく「外国にルーツを持つ子供たちに対する学習支援と居場所作りプロジェクト」も、私の中では上記の例と似たような認識を持っており、自身もフィールドワークにおいて良い変化と結果をもたらすために頑張ろうと意気込んだ記憶がある。あわよくば、自分が良い影響を与えてあげようとも思っていたかもしれない。しかし、フィールドワークを始めて間もなく、この考えが間違っていたことに気づかされる。鶴見ラウンジの空間には「良い」・「悪い」、「困っている」・「困っていない」などの分かりやすい問題は存在せず、人と人との繋がりや信頼関係の上でしか見出せない彼らからのニーズがあった。私はそれらを毎週の他愛もない恋バナや、UNO、コンビニへの散歩などを通じた生徒たちとの触れ合いの中で想像してはまた触れ合いに繋げ、それをまた想像し、を2年間ひたすら繰り返した。結果として、私が生徒達に与えられたものは、結局なものにもないと思う。彼らはみんなそれぞれが強く、逞しく、魅力的で、当たり前だがここで私に出会わなかったとしても、十分立派に時を重ねていくような、尊敬できる人たちである。しかし、フィールドワークという活動を通じて私は彼らと徐々に心を通わせ、信頼関係を築いてきたのだから、今後は今までほど会えなくとも、彼らのことを思い続け、側に居続けることに徹したいと思う。それが2年間フィールドワークを経験した私たちができる唯一かつ最大限のことだと思うから。ただ目の前の人を大切に想う、そんなソフトな手の差し伸べ方を、私はこの2年で学んだ。

～塩原先生とゼミ生へ～

この2年間を改めて思い返すと、本当にいろいろなことがありました。嬉しく楽しいことも沢山あれば、涙が止まらないほど悲しいこともいくつかありました。そんな中で2年間、月曜日のゼミと土曜日のフィールドワークは、私にとって、自分を優しく受け入れてくれる人たちに必ず会える、安心できる場所でした。何度も支えられ、救われました。大学生活中にそんな場所を見つけられたこと、そんな人たちに出会えたことに心から感謝しています。そして何よりそのような機会を創ってくださった先生に感謝と敬意をこめて、本当にありがとうございました。

時間をつくって、またふらっとこの居場所に集まったら嬉しいです。